

再発見・牛久第六話

牛久市文化財保護審議委員

栗原 功くりはら いさお

小川芋銭と中里介山①

芋銭が介山の小説

『大菩薩峠』の挿絵を描く

希代の文豪中里介山は明治18年(1885年)に神奈川県西多摩郡羽村(現東京都羽村市)で生まれた。大正2年(1913年)、『都新聞』に起稿された小説『大菩薩峠』は、昭和16年(1941年)まで29年の長きにわたって営々と書きつがれ、ついに未完のままに終わった世界第一の長編である。芋銭が、大正7年(1918年)に玉流堂書店より発売された大菩薩峠の挿絵を描いているので、芋銭と介山の関わりについて次に記しておく。

小川芋銭と中里介山

桜沢一昭著(同成社刊)

『中里介山と大菩薩峠』より引用

いささか旧聞に属するが、1月の上旬(本書は平成9年6月刊)、新宿小田急デパートで開催中の小川芋銭生誕120年記念特別展をのぞいた。小川芋銭は気にかかる画人の一人

である。というのは、今では稀覯本となつた中里介山の和装本・玉流堂版『大菩薩峠』第1巻『甲源一刀流の巻』(大正7年2月)の木版挿絵を描いているのが、ほかならぬ小川芋銭であるからだ。

若き日の社会主義詩人中里介山を知るために、当時の社会主義雑誌や新聞を閲するときは、そこには必ずといってよいほど小川芋銭描く日露非戦や荒廃した農村風景の漫画挿絵を見出す。

100点の出品を概観し、まず感心したのは、初期の漫画的作品から後年の新南画風の日本画へ転身していく芋銭独自の画境の広さであり、しかも、その背景には、自然や農民への限らない愛惜がたえず見えかくれする点にあった。

とりわけ、わたくしの印象にのこつたのは、『狐隊行』という作品である。昭和5年の作。牛久沼畔を狐火をかざしながら行軍する狐の群を描いたもので、そこには、完璧に新南画風の画境を確立させたゆるぎない自信のほどがうかがえ、かれの自然観・宇宙観をめぐりに凝縮させている。芋銭は河童を好んで描き、『カップ

の芋銭』とよばれるほどにカップのイメージがつよく、そのためか、かれの画技は、不当に黙視される傾向にあった。にもかかわらず、青年中里介山は、はやくから芋銭に注目した一人であった。日露戦争直後の明治38年、介山は、芋銭の芸術を『天下一品』とまで絶賛してはばからないう。その理由は、芋銭のもつ『俳味』にあるという。

そうした介山の芋銭礼賛が、はたして正鵠を射たものかどうか、わが眼でたしかめてみたいというのが、今回の特別展への最大の期待であったが、明治後期から大正初期の作品は、おもいのほか少なく、遺憾ながら、介山の見識を判定するにはいたらなかった。わたくしの見た限りでは、介山のいう『俳味』を感じさせる作品は、むしろ、つぎの大正中期以降、新南画を開拓しはじめのあたりから顕著となるようにおもわれた。

あるいは、介山は、漫画から新南画に転身する芋銭の芸術的方向性を、すでに予感していたのである。

介山も幼少期より好んで絵を描いた。その俳画風、庶民的な作風、ことに江戸ッ子医師道庵などを描くとき、なかなか捨てがたい禅味をのぞかせる。案外、芋銭の影響もあつたのかもしれない。

帰宅し、ひさしぶりで芋銭の描く『大菩薩峠』の口絵『地蔵菩薩』を開いてみた。特別展を見たせいであろうか、地蔵菩薩にしては妙に人間臭をただよわせたユーモラスな表情である。そういえば、見ようによつては、地蔵の顔が介山に似ているようでもある。介山から口絵を依頼された旧同志芋銭は、いたずら心も手伝つて、介山の相貌をおもいうかべながらこれを描いたのかもしれない。

70年の生涯、旅をのぞき、ほとんど茨城牛久にすぎた芋銭、多摩の山野に籠居した介山。ともに田園にユートピアをもとめた孤高の明治人であった。



中里介山著の和装本・玉流堂版『大菩薩峠』第1巻『甲源一刀流の巻』(大正7年刊)の木版挿絵『地蔵菩薩』を小川芋銭が描く。羽村市郷土博物館所蔵。同館提供。